

紙漉重宝記

① 白序

小人閑居して不善をなすの語、宜なる哉、女子のごとく
あらん事、禍ひをまねくの門、窮國の表示なるべし。
爰に麻苧・楮苧を青幣・白幣と唱へ、是を以神祇
をまつるや久し、されば紙漉業の賤しからざる事、かく
のごとし、是を以て耕作の餘力を考へ、女子も亦へ
これを製し國益とする。紙の品多し、爰には半紙
漉立のあらましを記し、生業のたより需んには、
ともならん事をねがふ。且紙の交易するの職、都會に
きそふといへども、其本末を弁へず、其勞苦をしらざれ
ば、猥りに費失する事、塵埃に等しきをいたみ、又は
此業の祖神の冥慮をおそれざらんや。予これを家
童に教諭せんと、其始終を画に顕はし、此一書を
なす。友人何がし是を梓にちりばめんことを乞ふ。予は
紙の問丸にして、文字に拙く、後笑の必然なることを
しる、されども此書、文を飭、筆を巧にするの意にあら
ざれば、友人のもとに應じ、其趣を記して、此序
と成す事しかり。

②

紙漉重宝記譜言

天竺にては古しへ経文を木の葉にかく、梵語を貝多羅葉と唱ふ。
唐土も昔しは木の葉・削竹に書せし事を傳ふ。本朝も大化・白
雉の頃、経卷の裏を用ゆといふ。其後紙を製するといへども、今の
布目・土手本のごとし。然るを慶雲・和銅の頃柿本人麻呂、石見の
國の守護たりしとき、民をして此製を教へ漉しむるより、此職を
この地に傳ふ事久し。されば周防の山口大内氏、代々相傳して
和漢通路の名家たり。よって本朝の紙、上品なる事をしつて、
唐土より是を乞ふ、大内氏これを許諾し、石・長・防の三州におしへ、
是を漉しめ、彼地へ渡すにより、大に悦び、是を賞せし事、書に傳へて
詳なり。唐土の製は今の唐紙の類のみなり。此紙書画の類の
外用ゆ事稀なり。実は下品と謂つべし。御國のごとき紙の
生ずる事、異國になし、これを扱ふ賈人、是等の事をさとり、必
おろそかにする事を傷むべし。此紙、石州鹿足郡・美濃郡の
間に遺跡せし事疑ひなし。隣郡浜田御領・土州・豫州大
洲等、各々彼地より傳ふ。訳て正一位柿本人麿明神、是を
製する御祖神たれば、これを仰ぎ、尊敬すべし。世人其神慮
を知らざるを歎き、かくいふのみ。

③
まかしそ

眞楮芋之圖

是を植付るには、古き根を分け、尺を二寸七寸、八分に切、根もと二寸三、四分土中へ埋み置也、西国にては、九、十月にこれを植置なり、上方にては、正月に植る、尤、土地の寒暖によりて違ふなるべし、植付し年、一尺ほどのびる、二年目に二、三尺と成、三年目に四尺四、五寸と成、四年目に六尺出来、たちよきは九尺ものびるなり、餘はこれにて考知るべし、勿論切置し一株に、年々五本程づゝ生へ益すゆへ、五年を歴れば、枝々繁茂してすさまじくなるべし
五年目より刈取、紙漉に用ゆ、古き畑に植るに出来よろしからず、新田の岸などに植るによし、尤、塩気を嫌ふ、とつきびを嫌ふ、こゝ少しき時は枯るゝ、過るも悪し、他の作物に糞をし、其餘情の自然に潤ふを好む、山ぎし・

③
谷間・堤などに生育すといへども、新田に過る事なし、折々糞を入れ、夏は日やけをいとふ也、雨過る年はのび過て、夏秋の風のために傷む也、其上猪鹿のために喰れぬゆゑに用意すべし、至て好喰ふもの也、はじめ芽ぐみせしも、例年十月には切捨るなり、此株が翌年五本程づゝ増木出来る故、年々五わりましに繁茂し、後々は長一間或は一問半出来、至て宜き年は、二問ものびるとしるべし、よつて利益の二つと成なり。
右眞楮芋（一説つうかけ）ともいふ、紙漉立に至りてよろし、種少く常躰かけ田一貫田に付、代銀三匁式分べいじ。

又、同じ種類にかけ芋あり、紙に漉立至てよろしけれども、紙の出来立少き故、價安へ、掛田一貫田、代銀吉匁六分位〇又、高芋といへる有、紙の性聊あしけれども、此木至て尺長へ、且、種を取に根分に及ず、挽切し木を植置に、芽を出し、又、糞の心遣ひも眞楮芋のいふなりとす、能出来、田地・水辺をかまはず、至て農家の心労なくして出来立也、其上、紙も少からず、當時專是を作る、此高芋、漸寛政の初より用れる也、紙漉草少からず故、常躰かけ田一貫田にて代銀式匁五分五、六りん、〇右各諸木に同く春芽ぐみ、夏繁茂し、秋落葉し、十月に至て刈取也、深山に植置に猪鹿の患なからんには、くだんの猪鹿を打取、楮芋のほとりへ埋み置時はしゝ来らず、又こやしもよつと北國人の物語りせし事あり、其是非を知らず

④
冬楮芋刈との圖

十月から取也
木立を見せ
刈すして商ふ
もあつ

間半まなかに
切そろ
へる

楮芋売買の事

楮芋立木を見て
売買をするならば、むき
とりし楮芋直段、
五貫目にて、譬たとへば銀
十匁の價あたいなれば、銀
十匁に荒木のかげ目
三十貫目とるべし、
これをむき取れば、
正味五貫目餘有、
手間は真木を
薪たぎにうつ徳分
利口に當あはせ

⑥

楮芋むしの圖

農人、鍋持なべもちなる者は
よりの合あひ蒸す
鍋から簀、皮むき
取し跡の木也、是を
薪たぎとする、たのみ
一尺五寸、三尺ほどに切
て蒸す、しほひへこして小口の
かはしむけかゝるを見て
熟せりを知る、冬の夜
五鍋、六なべほどは蒸なる
よじぬべし

おらに用が有るなら
むかひのたをからひや
これといふて下され
かたふ

くびつて
くれふ

わしや 紙布しふの五枚も
あれば、ゆきの中
でもさむらはなア

をらは本がんじ

宗むねにやぬる

やすらうつて

下され

なむあみだ

<

ア、かたじけ

ない

鍋寸法 一尺六、七寸
こつてよし
藁わらにこき

木の根を鍋
底そこにすべし

だあふ、かう
ぞむそまよ
もちを
むして
くわせ

同かはを剥く圖

図のじゆん
手にもち、皮かわをむき
とるなり
中の真木まき
たきぎの外

用立なし

だあよ、をらも
むひて
やらふか

⑦

楮芋皮を干の圖

皮をむき、直に干す
女の片手ににぎる程
二、三日の間はこほし上
風あれば一日に
かはく事もあり

こんな子よ
むくなり
をらがやうに
もってむけ
やあれ。
そふなごと
ひがし石見の
いじ、ちほねち
こなるれ

くらのめをあげき
よく干すべし
其後五貫目つゝ掛
改め、把たはする
ようかはいた、
こねた所を
とひてほそら

同売買の事

五貫目把き駄といふ時は
三十貫目也、おっとり五貫
目にて、右の干皮銀九匁、
十三匁、廿匁、至て凶年は
廿八匁位する事、まれに
ぞ有也、諸国へつみ出す
ときは、引け物多し
同國にて東石見の
皮二、三わら
安し、内皮・
外かはむきや
うにてちがふ也

⑧

同皮を漬置く圖

いざや紙を漉ん
と思ふ時、朝より晩
晩方なれば朝
まで、水へ漬おき、
持かへり、うす皮を
すじき取なり。

さまれく
こんなやと
上方の
馬は四十貫
から付る
げな
どかな
事しや

画圖の「つゆ」
いたし漬置也
棒の中を除置は
かたげかへる手廻し也
一日一夜つけおき
てもよじ。

こしが
いたア

同「す皮を削圖」

黒皮をすじぎ、捨るなり
圖の「つゆ」胞「こ」ておせ入
前へ引く、黒皮悉く去
すじる也、黒皮ちり紙
漉し用ゆ、これを
ざる皮と唱ふ、是を
川にて能洗ひ、釜へ入
煮る、其後くならかし
能たゞき、こころんを入て
漉也、楮芋少き年は
桑の木を製す、楮芋の「つゆ」
桑の葉もすきこむなり

水に漬し

ゆへ、ひらたふ

なる

馬のくしと

臺に付る

ざる皮計にて漉し

ちり紙を生葺

すきと云、性よじ

⑨

同「あへ出しの圖」

ざる皮商ひ、
木かはとも云、
かけ目十貫目
代銀十二匁へらこ
高下もあり
所にてすき
あまり、防州
岩国・藝州領
尾形・大竹へ運
送り商ふ
なり

楮芋煮たきの圖

右の「つゆ」製せしを、釜の
中へ入、かくの「つゆ」

ざる皮、けつり取し実を、かけ目五貫目、三日にすへ

上手は二日にすへ、これを漉實銀へ。六匁なり、

此五貫目を川へ持行、よくあらひ、さしもの又は罍

かき・桶にてよくあらひ、おせ入

石を置、粟を取と

つるべこ、

夫より

左の

釜にて

煮る也、

けつりし実

をそりりとこぶ、

ねばりけなき

やうにあらひなす

釜は二尺六寸

二尺七寸

棒二本こしらへ

立る、根本は楮芋にて

留る也、その上へ蕎麦・饅

饨などをゆでるじゆへ、画圖

の趣に追々入、一時に煮也

煮汁はそばがらを焼、此灰の

あくを取り、煮也、こるこしたがひ

一本の棒にて芋あらはじゆへかき廻しく

数遍すべし、其後くだんの棒を引ぬく也、其穴より湯まわす

ゆへにゆると知るべし、とかく片煮のせぬようじ用意する事肝要也

⑩ 自然煮といへども、熱め事有、其時、蠟灰一升程入る、早速熱るとしるべし、蠟灰な

き時は、石灰にてもよし、灰を加へしは紙漉立し後、紙少しく赤みさすなり。

爰にいらざる事ながら、心得のために記し置也、初め蒸す節、又、かくの

じゆへ煮る時、いかやうに致しても、蒸・煮出来ぬ事有、これはいかがいたし、かく

にへぬ事なごよ、不審するに、是は俗に言狗がみの付たるとしるべし、

彼地にては、平生心得あるゆへ、騒ぎ申さず、早く祈禱などいたし、退

くるなり、狗かみは異やうのものなり、此湯にかざらず、鉄銑製の

たゞらに付事あり、左ある時は、其湯口より湯一滴も出でぬるなり、

奇怪の事なれども、心得のためこれを記し置なり

楮芋再あらはし圖

いかきへ入れ

川水にて

悪汁灰の

類をよへ

あじひ

そよひなす

そのじゆへに

霽をよへ

たらしなす

⑪

とろろ草の種類

大豆せうじゆ小豆を作る
時候等し

春生じ花はなへ、花の中

実を生ず、ちいさく六角有、

胡麻に似たり、風かぜに似たり

花・実用立なし、根を用ゆ、

左に図あり、木の象、綿木の
つじつ

山とろゝといふは作りず、

自然じねんに生ずるもあり、

これを塵紙等漉に

用ゆ、其紙いろ赤くなる

とつるべし

花しほるゝを引ぬき、

五月入梅つゆの間に干し、

たくはふ也、根の大きさを

八分位、長く、牛蒡の

ごとし、石原に出来る

は尺短たけし

売買銀きぬと

かけ目百廿目

安き時はきぬと

かけ目五百目

⑫

楮すし擲なく圖

明日紙を漉んと思ふとき

前夜にそゝりをあらひ

翌朝よりたゝくし、

朝飯しかけ置き

にへる間たゝけばよし

冬紙はとろゝばかり入

てたゝくなり、春紙に

はのりを入れるゝもあり

左なくては漉がたし

此音遠とほくきこへて、さんじん

物さびしき山家さんか

身みこしみくと哀あはれ

擲たく棒ぼう之圖

長サ三尺、先キは四角、元は丸し

⑬

半紙漉の圖

杉原などは、けた重く男の職也

半紙は女漉なり、すかんと思ふ

ひげ・皮をこそげとり、擲なく
其製とろゝ汁のつじつ
水をさし入るゝほど、やはらか
に成とするべし、猶かげん
あるべし
紙漉一船にき升ほど入と
心得べし
尤、すいのうにてこし、小桶に入
置、入用程つゝつかふ。

擲臺板 長さ五尺、幅三尺余

厚さ三寸五分、檜・桜にて作之

ほどたゞきかため、桶の中へ
入置し玉をかぎとり、とろゝを
すいのうにてこしませ、けた
を持って、数へんませあはせ
ゴブリくくと云、ねばり少ければ
とろゝをます、至てかげん物也。
竹を以てかきませ、引上見れば
海苔ひのしのごとし、かげんする也、竹にかゝり
ゆるほむじ、こなるゝをよじとす
とつかへくくませるほむじ。

手冷るゆへ、始終
湯をたぎらし、折々
手をあたゝむる

手冷るゆへ始終湯をたぎらし折々手をあ
たゝむる。

道具の圖

入子輪 外輪 簀

水囊 じへぼじり

竹 長さ一尺三寸 細文筆の軸
のじゅう

此簀古くなる時は、馬尾の形紙に付也
是を紙中買、「簀が高い」と唱へ、かひらせ
内外輪、杉にて製之、
手かるく、女の力に應ずる
ごとくす、外輪へ簀を
しき、入子の輪を以堅め
用いるなり
竹の簀、竹を水引の如く
能々けづり、馬の尾を以
圖のじゅうにてつらゆる也
但し右の道具、式具
用意あるべし

⑭ 其二

漉たる紙を
けたもちとせ

左のけた持せに
もたせ、雫をたらし置、
今一つのけたにて漉、先の
持せ置しけたの紙を
うつし置、又すきかくる
事、先のごとし、馴るゝに
随ひ、至極早きもの也
紙くさ少なく漉がた
き時は、はじめの製
のごとくすべし

すきたる紙
何枚もかく
のごとく重ね
べし

箱間半に
一間少し
せまし
手がつめたあ
けへ、めつたに
こがあらぬ
ものじゃ

- 一 寒漉、とろゝ計にて製するを生漉と唱へ、書物に用ひ、年久敷所持するに
虫入らず、上品にして石州紙の妙也、春漉、のり加へしは請合がたし
- 一 摂州名塩漉は、右の上へべを加ふ、諸国のりの人らざるは稀なり、
近年、去御國にて紙漉御糺の節、答左の通彼地にては半幣
を吉賀紙といふ
- 一 白大極上吉賀紙六×入
代銀九拾四、五匁、
同中物同八拾五匁、同下物同七拾匁より五匁、右不景氣
漉方手許 一 楮草三×目
代銀六匁三分、草けつり取
成一件の吉賀五百目にて吉賀紙一×
二千枚
- 一 灰代銀一
分六り 一のり木代銀二
分四り 右吉×の紙漉一日に四束、しかれば二人半役、板へ付干
申に二人役、但し荒草けつりたなへにいたし
候へば一人前に五百目ならでは出来不申、勿論女子共の手間
一向算用に入不申候、此外たき代
四分程かゝり候へども、山里の事故、算用に入不申候

⑮ 紙干の圖

板へはりし方

紙のおもてなり

吉間板に

表へ五まい、裏五枚、圖の
ごとし、紙一方少厚し、其方へ
はじめ圖のごとき竹を以て
まき取、右の手にしへぼつき
を持って、なで付る也、上手入へし
心得あり、日よりなれば早く
かわくなり、雨天なれば
火にかけかはかする事あり
一人漉、板四十枚程用意有べし

此板を
床と
いふ

だあよ、とゝうは
たにへかみを
取にいきやつたけへ

ついでむらや
しやるまあ

こななこみ
おちやあるな

⑩ かんべんして
おろそかに紙
つかふべからず

此圖を見て
しるべし

ほしたる紙

吉枚、風にて

谷へふきちりし
をとりに行

にも一時計り

かゝる。竹を

わり、ちりたる

紙を

はさみ

持

かへる

なり

どひやう
し
ものが、
かみを
ちらし、
おらに
なんぎ
を
さする
の

⑪

半紙裁切圖

半紙一折二十枚づつに、間あひへ

藁を入、十折國にては是を一束と云、
都にては是を五帖と云

右の紙を臺木へのせ、角の

寸法極めし定規をあて

右の足にて踏付、左の手に

鎌を持って、これをたち切也

是を十かさね一又とつて

六又合せ一丸と成し

御上納あるひは賣紙にも

出すなり

左に各圖を以て

其苦をしらす

半紙仕立る圖

さんよ

紙かいが

かみも

しねぬ、さうじ

かみで

まじを

はれ

この紙はよい

かみじゃ

御見ゆりも

はやう納る

まじ

⑱

俵つくりの圖

おらは酒をのもぶと

思ひて、あこの月から

かみを十枚おして

おひた、おやかたへ

しねねば

よいが

大坂へいて見い

銀をぶがうで

クワンくとかけてとる

をらはいつさい

がてんが行ぬ

どがあ

こがあ

するかしらぬ

濱出しの圖

三里の所

おら二かへり

めじゃ

アへんごや

おそじ

出やったの

しじい

しほを一俵

かふてきた

⑲

石州高角 正一位人丸大明神社圖

吹上濱 湖水 くまの松 高津川

人丸出生の地 戸田村 かたらひ

たかつの 長門かい道 中の嶋 社家 高角町 渡し場

本社 拝殿 画馬堂 二王門 筆柿 真福寺

⑳

國東治兵衛 印

靖中庵桃溪画 印

寛政十戊午四月吉日

大野木市兵衛

浪華書林

海部屋勘兵衛